ボイジャーと Internet Archive

Internet Archive 25周年記念　短期集中連載



VOYAGER

ボイジャーと Internet Archive

Internet Archive 25周年記念　短期集中連載



VOYAGER

人類すべての作品をインターネットへ



Brewster Kahle launches Internet Archive 1996【日本語吹替】

目次

第五回　知を未来へ残すこと

本は売って終わりじゃない

片岡義男全著作電子化計画と国立国会図書館デジタルコレクション

作る、見る、売る、残る

第一回　ボイジャーとInternet Archive

Internet Archiveという組織をご存知でしょうか？　知らないという方でもWayback Machineという「消えてしまったWebページを保存しているサイト」を知っている人は多いのではないでしょうか。このInternet Archiveが、今年10月29日に25周年を迎えます。そしてボイジャーも今年の10月26日から創立30年目に入ります。それを記念して、ボイジャーとInternet Archiveをテーマとした短期集中連載（全5回）をお送りします。

Internet Archive



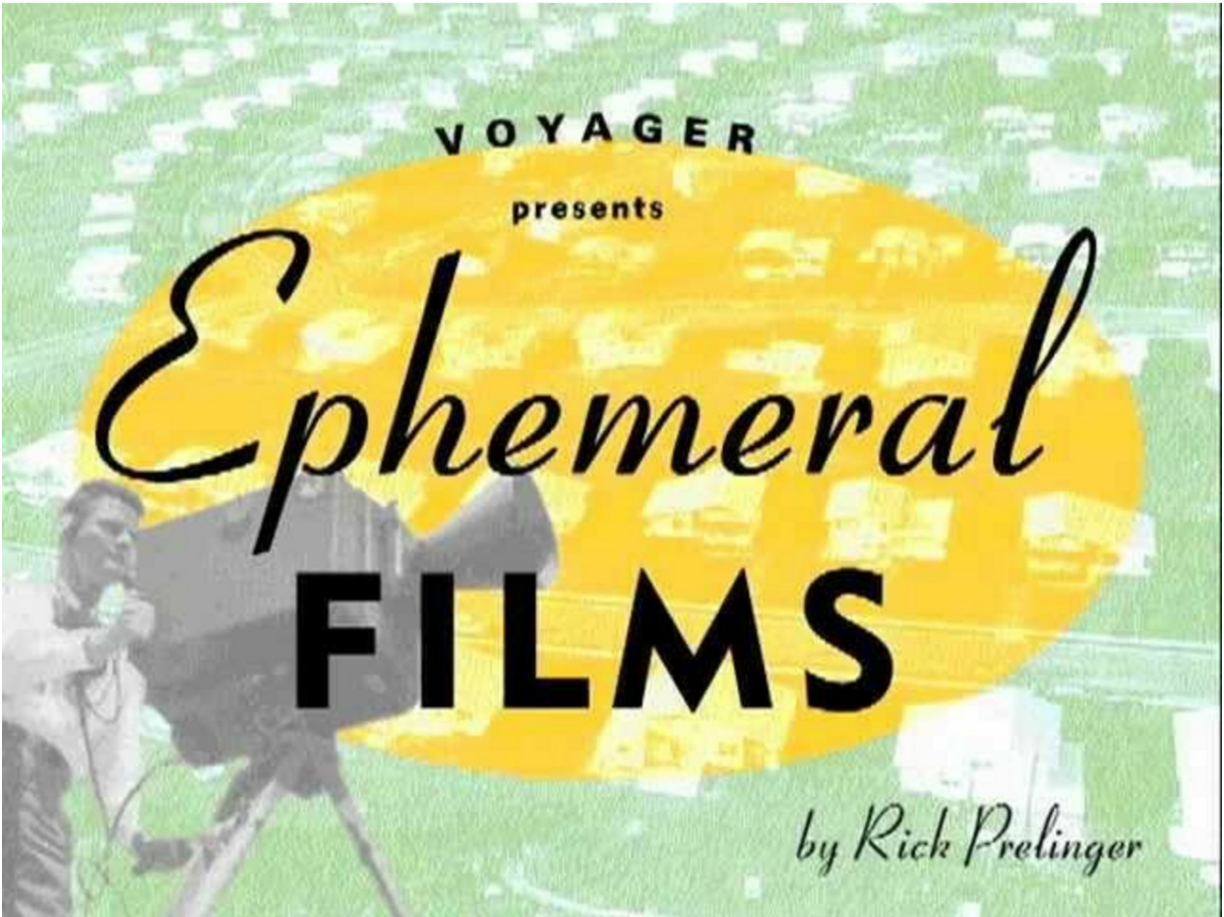
サンフランシスコにあるInternet Archive、元々は教会だった建物。

Ephemeral Filmsとリック・プレリンジャー

１９９０年代に、ボイジャーが出版した「忘れられたフィルム（原題Ephemeral Films）」というマルチメディアCD-ROMがあります。このCD-ROM、リック・プレリンジャーという人物が集めていた企業の宣伝フィルムや公共マナーの喧伝フィルムなどを収録したもので、当時のアメリカ市民の暮らしぶりや夢見ていたものが描かれていてとても興味深いものです。

このリック・プレリンジャーはInternet Archiveの理事でもありました。そのコレクションを集めた「プレリンジャー・アーカイブズ」もまたInternet Archiveの一大コレクションになっています。

Ephemeral Films 1931-1960



当時のCD-ROMを短い映像で紹介しています。

Book Server構想、そしてボイジャーの参加

ボイジャーが実際にサンフランシスコにあるInternet Archiveを訪れたのは２０１０年のことです。当時のボイジャーでは「ドットブック」というフォーマットで、シャープのＸＭＤＦとともに、日本における電子書籍のデファクトスタンダードの位置にありました。しかし「電子出版の普及には、世界の標準が必要」との考えから、ＥＰＵＢという世界標準のフォーマットに積極的に関わり始めました。

さらに世界の標準のフォーマットができたらその先にあるもの、それは私たちが自由に電子書籍を活用できる仕組みです。Internet Archiveでは「Book Server構想」として、それに取り組んでいました。ボイジャーもその構想の正式メンバーとして推進に参加することに合意しました。



Internet Archive本部にて、創始者のブルースター・ケールとボイジャー代表取締役（当時）萩野正昭。

この写真に写っている人物が、ブルースター・ケール。Internet Archiveの創始者です。活動の目標として「全知識体系への全世界的アクセス（Universal Access to all Knowledge）」をかかげています。

私たち一人ひとり、あるいは一企業・団体ができることには限界があります。世界の標準と調和し、手を取り合うことが重要と思い知らされたことでした。

ブルースター・ケールと、当時のプロジェクト中心メンバーであったピーター・ブラントリーへのインタビュー動画もご覧ください。

「Book Server」を語る



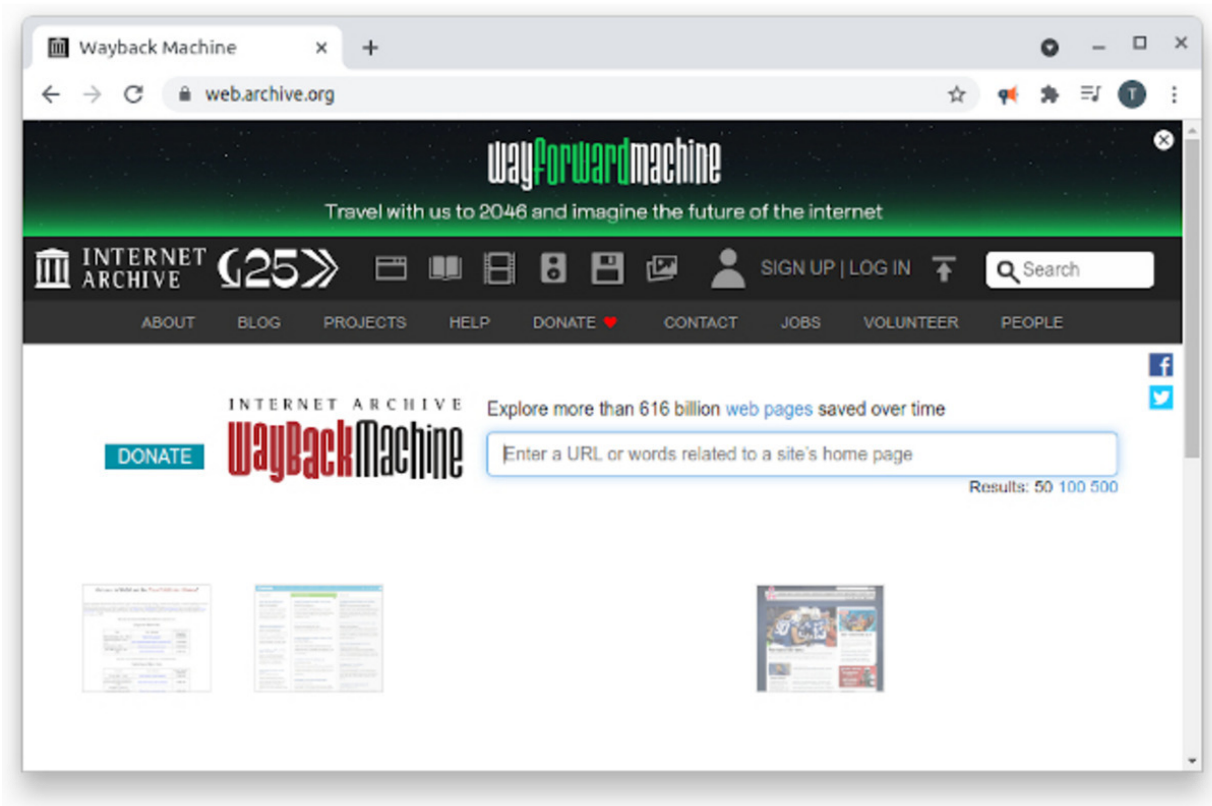
ブルースター・ケールとプロジェクト中心メンバーであるピーター・ブラントリーへのインタビュー動画。

第二回　Wayback Machine

全世界のWebページを、時間軸にそって記録する

Wayback Machine。自分で使ったことはなくても、消えてしまったWebページの「魚拓」として見たことがある人は多いでしょう。このWayback Machineは、Internet Archiveによって提供されています。むしろ多くの人にとって「Internet Archive=Wayback Machine」という認識かもしれません。

Wayback Machine



ここにURLを入力すれば、すでに姿を消してしまったWebページも見ることができる（できないこともある）。

その集められた膨大なページ

前回、書いたように、Internet Archiveの創始者ブルースター・ケールの掲げた目標は「全知識体系への全世界的アクセス（Universal Access to all Knowledge）」でした。そのとおり、集められたWebページの数は膨大です。

その数は、２０２１年10月時点で、

・Webページ：5，８８０億
・本とテキスト：2，８００万
・音声：１，４００万
・動画：６００万
・画像：３５０万
・ソフトウェア・プログラム：５８万

という数に及びます。

消え去るもの、残るもの

デジタルデータはいくらでも無劣化の複製ができるので、紙よりもずっと「残す」ことが容易です。にもかかわらず紙に比べると消え去ってしまうもののなんと多いことか！

Webページは公開後にも改訂が容易にできることもあり、また必ずしも後世に残すことを目的にしていない場合もあります。むしろ論文などを除けば、後世に残そうという目的をもったWebページのほうが少ないかもしれません。

Weyback MachineによるWebページのアーカイブは必ずしも完全ではありません。会員制のサイトや、CGIなどで動的に生成されるページはそもそもアーカイブすることはできません。ですが、それによって知を後世に残すというInternet Archiveの活動が色褪せることもありません。この「後世に残す」という目的はボイジャーとも共通した思いです。

第三回　Open Library

Open Libraryで何ができるのか

Open LibraryとはInternet Archiveが提唱するBook Server構想を具現化したものです。電子図書館でもあり、書籍データ・ベースでもあります。

そのゴールとして、以下のようなビジョンが掲げられています。

> The ultimate goal of the Open Library is to make all the published works of humankind available to everyone in the world.（公開されているすべての人類の作品を世界中のすべての人が利用できるようにすることを目指す）

このOpen Libraryにはだれでも参加できます。少し古い情報ですが、２０１０年のボイジャーパンフレット「そして船は行く」の中でOpen Libraryの登録方法を紹介しています。

２０１０年の東京国際ブックフェア、ボイジャーではピーター・ブラントリーを招いて、Open Libraryについて講演していただきました。その動画がこちらです。

東京国際ブックフェア2010　講演映像



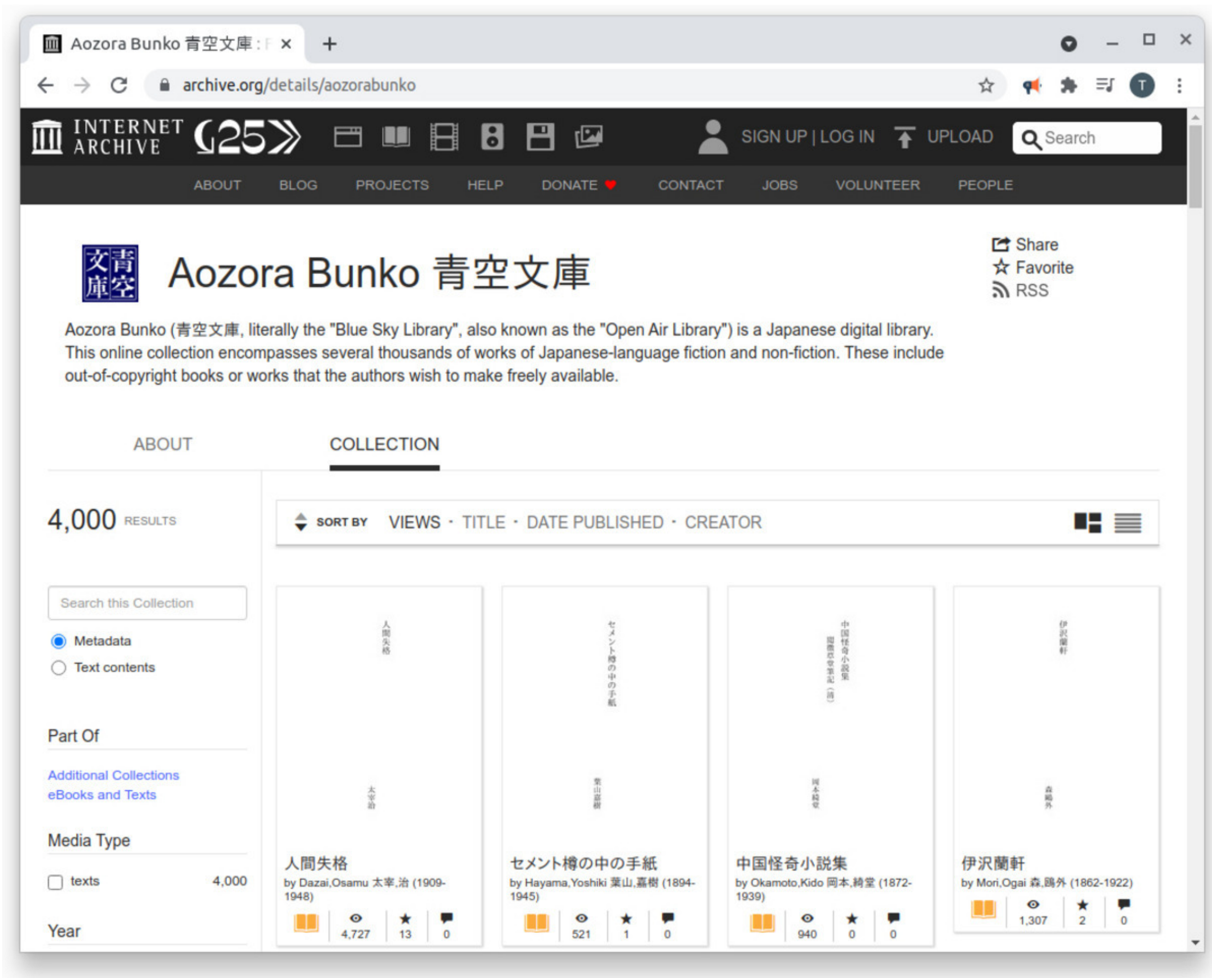
Open Libraryの責任者（当時）ピーター・ブラントリーによる講演映像。
OpenLibraryの仕組みや目的について語っている。

Voyager Japan releases 4,000 Japanese eBooks on Internet Archive

　ボイジャーでは、このOpen Libraryに対して、２０１１年に、青空文庫の４，０００作品を電子書籍（ＰＤＦ）化して書誌情報とともに提供しました。そのときに、Internet Archiveから出たプレスリリースがこちらです。

　こちらはOpen Libraryに収録されているだけでなく、Internet Archiveの特別コレクションとしても公開されています。

青空文庫特別コレクション



Open Libraryに収録された青空文庫4,000作品は、Internet Archiveの青空文庫コレクションとしても公開されている。

第四回　Books in Browsersと“BinB”

Books in Browsers

　２０１０年から２０１６年まで「Webブラウザで本を読む」をテーマにInternet Archiveで開催されたイベントがあります。それがBooks in Browsers（略称BiB）です。ボイジャーもこのイベントに２０１０年から２０１４年まで参加しました。

Simpler, Smaller, Stronger



Books in Browsers 2012でのボイジャー代表取締役（当時）萩野正昭によるプレゼン動画。

Books in Browsers会場



会場は、Internet Archive。5年以上働いた人たちの半身大人形が椅子の間に立っているのが印象的。写真前列の人形はブルースター・ケール。

このイベントの立役者も、Book Server構想、Open Libraryの責任者であった、ピーター・ブラントリーです。彼の尽力なしにこのイベントは成立しなかったと言っても過言ではありません。Books in Browsers 2012で、彼は次のように語っています。

新しい出版で大切なのは物語です。フォーマットではありません。Web上ではどんなコンテンツも操作可能になります。したがってそれはフォーマットに中立な出版になるでしょう。つまらないと思うかもしれませんが、これは革命的なものです

ピーター・ブラントリーは「マニフェスト 本の未来」（ボイジャー刊／原著はオライリー）という本の中でも「形なき本で図書館を作るということ」という項を執筆しています。

マニフェスト 本の未来



デジタル化が完了した「第二段階」で出版界で何が起こるのか?

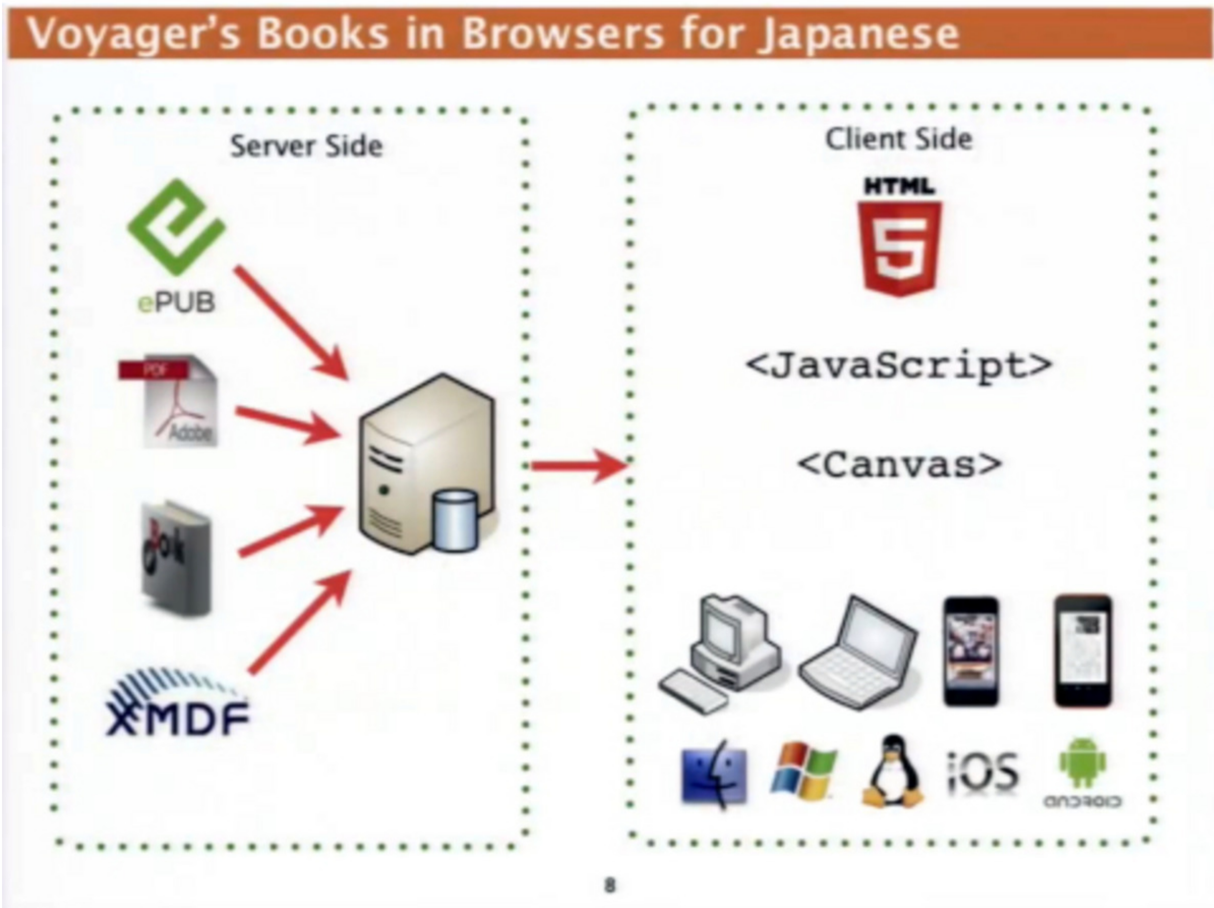
そしてBinBの誕生

すでにお気づきと思いますが、ボイジャーが開発した、「Webブラウザーだけで本を読む、電子書籍リーダー「BinB」」、その名前は、このBooks in Browsersから名付けられました。

２０１１年頃の電子書籍リーダーといえば、アプリが当たり前だった時代です。そんななか、ブラウザーだけで本を読むという方向性が果たして正しいのか、このイベントには大変勇気づけられました。

そして、Books in Browsers 2011で、開発中のBinBを初披露します。

COMA Voyager



Books in Browsers 2011、ボイジャーによるプレゼン動画。BinBの説明は8:00くらいから。

正式にBinBが世の中に産み落とされたのは、２０１１年12月８日のことでした。

ボイジャー新読書システム記者発表会

記者発表

新読書システム



2011年12月1日
於：東京・青山　アイビーホール2F シャロン

VOYAGER

2011年12月1日に行われた、ボイジャー新読書システム「BinB」記者発表会の動画。

第五回　知を未来へ残すこと

本は売って終わりじゃない

出版をビジネスとしてとらえれば「売れる本」を売れば終わりです。しかし私たちは、なぜ出版という行為を行おうとするのでしょうか？

出版とは、自らの、考え、情報、物語を、自らの責任で世の中に発信する行為です。著者にとっては、本を売ってお金を稼ぎたいという以上に、自らの出版した本を後世に残したい、自分が生きた証を残したい、という欲求はごく当然のものと言えるでしょう。

しかし私企業にできることには限界があります。永久的な保存を担保することはできません。

片岡義男全著作電子化計画と国立国会図書館デジタルコレクション

後世に本を残す役割を担っているのが、国立国会図書館です。

紙の本では納本制度が確立しています。しかし、実は現時点（２０２1年10月現在）では有償で販売されている電子書籍の納本制度が確立していません。

そこでボイジャーでは国立国会図書館に働きかけ、まず片岡義男作品を国立国会図書館デジタルコレクションに提供することで電子納本を開始しました。（プレスリリース「作家・片岡義男小説（４４９作品）、国立国会図書館の電子閲覧公開へ」）

今後、理想書店の作品も同様にデジタルコレクションへの提供を予定しています。

国立国会図書館デジタルコレクション

ボイジャーが「電子納本」した片岡義男作品の閲覧は館内限定。検索時には「国会図書館内限定」をチェック。

作る、見る、売る、残る

ボイジャーのWebサイトでは「作る、見る、売る、残る」をスローガンにしています。

- 作る：自力でデジタル出版する人を支援するWebサービス「Romancer」
- 見る：電子書籍をWebブラウザだけで見ることができる「BinB」
- 売る：個人の作品でも販売できるプラットフォーム「理想書店」
- 残る：国立国会図書館デジタルコレクションとの連携。

ボイジャーもInternet Archiveと同じく「将来に知を残す」というゴールをもっています。自書を出版したいという作家の思いを形にする。それがボイジャーのテーマです。



Internet Archive 二十五周年記念

ボイジャーとInternet Archive

著　者　　　株式会社ボイジャー

Published in Japan